

「モダニズムの絵画」プレレジュメ

『モダニズムのハード・コア』第一週発表班

笠原・中村・水野

はじめに

私たちはクレメント・グリーンバーグ著「モダニズムの絵画」を扱います。この小論文は、グリーンバーグが1965年に著したものであり、彼によるモダニズム絵画論の総括と言えるものです。今後四週に渡って研究していく『モダニズムのハード・コア』第一回目となる今回の発表では、まずは今後の研究の基礎となるこの小論を正しく理解することを目指します。つまり、グリーンバーグが定義する運動としてのモダニズムの性質、またモダニズムの絵画の特質について発表、議論の場で考え、意見を述べ合うことによって共通理解を目指していきます。

今回のプレレジュメでは、この小論に関する私たちの班なりの解釈を載せておきます。全てに目を通す必要はありませんので、みなさんが文献を読解するさいの手掛かりとして必要が生じた時に使用してください。

要約

●モダニズムの自己-批判

【モダニズムの本質】

規範そのものを批判するために、その規範に独自の方法を用いることにある。

【「カント的」な内在的批判】

一般的な批判(=外側から批判)とは違い、批判されている諸手順自体を通して批判(=内側から批判)する方法。しかし、その目的は自身を破壊するためではなく、より確固たるものにするための批判である。

●芸術の低レベル化からの脱却

【娯楽や宗教との同化】

啓蒙活動により諸芸術が否定され、芸術のみが与えられてきた経験が娯楽や宗教でも経験できるようになってしまった。

⇒芸術が芸術である理由がなくなってしまった

諸芸術は、それぞれ自分自身の責任で、「他の活動とは異なった、本来的価値のあるもの」であることを、実証していかなければならなくなった。

→**絵画に固有であり、独占的であるもの（絵画の純粋さ）を求めていく**

別の芸術と共通すると思われる効果を除去し、「純粋さ」を求めること＝自己-批判
自己-批判をしていくこと＝徹底的な自己-限定（＝徹底的な純粋さの追及）

●絵画の平面性

*モダニズム以前の絵画（＝リアリズム的でイリュージョニズ的な芸術）

…メディアムを制限的で消極的な要素とし、**技巧でメディアムを隠蔽してきた**

*モダニズムの絵画

…メディアムを積極的な要素とし、**メディアムで芸術を注目させるようにした**

※「メディアム」＝絵画を描く際に用いる、キャンヴァスや絵具などの表現するための媒体。

【支持体（キャンヴァス）の平面性】

諸芸術において**平面性**および**二次元性**は、絵画がほかの芸術と共通していない（借用してもされてもいない）唯一の条件であった。

【平面性の中の三次元空間】

絵画という二次元性を含む物体の中に、三次元空間が存在するという矛盾がある。

→人は絵画に描かれている事柄に意識を向ける傾向にあるが、モダニズムの絵画は、まず絵画の持つ平面性に注意を向けさせようとした。

絵画の平面性を意識させる＝絵画独自の持つ純粋性を意識させる 平面性（純粋性）を意識させて初めて、目的である自己-批判に成功する。

●モダニズムの絵画は、16世紀から続く彫刻的なものへの反抗を引き継ぐ

・モダニズムが放棄してきたもの

→それとわかる三次元の対象がその中に存在しうる類の空間の再現

＝描こうとする対象物を見て、その対象物がある“**場所（＝空間）**”を再び描くこと

・絵画芸術の独自性を減ずるもの

→再現されている諸事物についての連想、**三次元を連想すること**

＝実在物を目にするすることで、それが三次元の空間の中に存在することを連想してしま

うこと

- ・三次元性は彫刻の本分であり、「絵画が絵画である」独自性ではない
- ・彫刻的なものへの反抗は、モダニズム以前より始まっていた。

絵画におけるレリーフ（浮き彫り）に見えるイリュージョンへ向かう陰影の付け方、立体感の出し方 →彫刻から学んだこと

⇒絵画の独自性ではない

→彫刻的なものでない、絵画の独自性の最初は「色彩」であった。

→印象派の画家たちは彫刻への反抗に自覚的になり、「色彩」に変わって「**視覚的純粋性**」

を絵画の独自性とした

●「絵画が絵画である」その他の基準を再検証していくこと
＜ここで挙げられている絵画芸術にとって基本となる諸基準＞

1. 絵画の囲い込む形態＝額枠の基準
2. 仕上げの基準
3. 絵具のテクスチャーの基準
4. 明暗と色彩の対比の基準

⇒これらが「絵画が絵画である」基準であるかどうか**検証**されては**再検証**されていく

→新しい表現のためだけではなく、**これらを基準としてより明らかに提示**するため

⇒この検証は決して終わってはいない

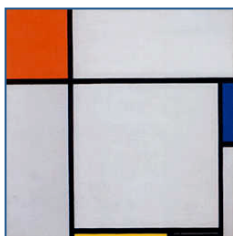
●「絵画が絵画である」必要最低限とは？

モダニズム

＝絵画が絵画であることをやめて任意の物体になってしまう手前ぎりぎりまで無際限に、これらの制眼的条件が押し退けられうるのだということに気づくこと

⇒絵画が絵画であると認識されれば、何を描いてもイイ

＝諸制限がより遠くへ押し退けられれば押し退けられるほど、ますますそれら（＝遠くに押しのけた諸制限）を遵守されなければならないということに気づくこと



(ex) モンドリアンの絵画（図1参照）…

絵画の囲い込む形態や彩色などは絵画を作る上で十分な基準で描かれている。←絵画が絵画として見られるギリギリの制限

その他の制限を押し退けるほど、押し退けた制限が必要だと気付く。

(図1)

この抽象性に慣れると、額縁に黙従するその性質そのものが、制限を遵守することにも繋がり、具体的に描かれたものより伝統的に見える。

●視覚的な三次元性

- ・モダニズムの芸術の原理を大筋で示すこと

＝モダニズムの芸術の“本質”である基準を示すこと

- ・モダニズムの絵画の“本質”である基準となる平面性 →必ずしも全くの平面ではない

- ・表面につけられる最初のひと筆

→実質上の平面性を破壊する

→三次元のイリュージョンと示唆している

→視覚的な三次元性

- ・モダニストが作り出すイリュージョンは、眼によってのみ、人がその中を覗きみることができ、そこを歩いていくことのできるような空間のイリュージョンである

⇒描かれるキャンバスが地となり、そこに描く絵具などがキャンバス上にのることで三次元性が生じる。

→立体的な三次元性ではなく、**視覚によってのみ認識される三次元性**である。

●芸術の科学的方法への接近

科学的方法：ある問題が解決されるためには、その問題が提示されている領域と全く同じ領域内で解決されなければならない。

Ex. 生理学における問題は生理学において解決されなければならない。それが心理学の領域の中で解決されるためには、その問題が心理学の問題として提示されていなければならない。

→視覚芸術は視覚的経験において与えられるものだけに自らの問題を限定すべきであり、他の諸感覚において与えられるものは扱うべきではない。

しかし、このようなモダニズム絵画の科学的方法に類似した自己一批判的方法は、美的

な質、美的な成果と何ら関係ない。

⇒芸術と科学の方法の類似は偶然の出来事であるが、それらが示すのは両者が同じ価値観の文化、時代に属してということである。

●実践の問題としてのモダニズム絵画における自己一批判

→モダニズムの芸術家たちは各々がそれぞれ芸術の本質を追い求めることで、それぞれ自己一批判的な芸術活動を行った。

⇒モダニズム絵画の自己一批判は意識化され理論化されたプログラムではなく、自然発生的で無意識的な実践の成果である。

●モダニズム芸術が持つ過去との連続性

絵画を制作する際、絵画それ自体の持つ性質(平面性、囲い込む形体(額縁)、仕上げ、絵具のテクスチャー、明暗と色彩の対比など)に制限される。

→絵画の歴史は「絵画」というものそれ自体＝絵画の諸基準を創造することであった。

⇒モダニズムは絵画に不可欠な基準(制限)を検証し続けるが、検証される基準(制限)それ自体は過去の絵画制作によって選択され、創造されてきたものである。

●モダニズムの無意識的な実践的検証

モダニズムは理論を前提とせず、無意識的な実践によって絵画の基準を論証した。

→実践的に絵画の基準を一つ一つ検証すること(一見、破壊的に見えるが)は、検証されたものが絵画の要素として不可欠なものであると保証されること。

⇒それらの基準は何ら新しいものではなく、伝統的な基準を再確認しそれらを確固たるものにしたすぎない。

●当時の批評に対する批判

当時、現代美術に関して書かれた批評はジャーナリズム(新しいものを紹介する)にすぎない。

⇒上記のような批評は当時の現代美術を過去の慣習や因習から「解放」されたまったく新しいものとして提示するが、それらは過去との連続の上に作られているのである。

●芸術は過去との連続なしにはありえない

⇒芸術の過去がなければ、また、過去の批判がなければモダニズムの芸術は不可能である。